

## 血液疾患患者の化学療法後の外泊時における不安 —実態調査に基づいたパンフレット作成の一考察—

key word 外泊 化学療法 不安

18階東 ○岩崎千恵 上杉有紀 浦次麻衣子 浜砂弥生

### はじめに

血液疾患患者は、寛解導入療法が終了し汎血球減少から回復すると、治療の合間に入院後初めて外泊をする患者が多い。しかし、化学療法後であり、患者によっては自宅へ帰ってどのような点に気をつけて生活すればよいか分からず、不安だという声が聞かれる。また自宅に帰ると不安が多いので、外泊を控える患者もいる。しかし、外泊は気分転換を図るなどの効果があり、自宅でより充実して過ごしてもらうための指導の検討は重要だろう。

以前、平成11年の看護研究で作成したパンフレットを用い、退院後の生活について指導を行っていた。しかし、そのパンフレットは現在行なっているものと内容に異なる部分があるため使用されていない。また現在は指導マニュアルやパンフレットがなく、口頭での説明のみであり、看護師により説明内容も異なっている。

小林らはパンフレットを使用することで「外泊中も指導内容の振り返りができ、安心して生活を送れる」と述べている。そこで、退院後の生活と外泊中の生活が似ている部分があるため既存の退院パンフレットの活用を考えた。本研究では、患者が外泊時に感じた不安や疑問の内容を明らかにするために質問紙調査を行い、今後のパンフレットの示唆を得たのでここに報告する。

### I 研究方法

1. 対象：平成18年3月以降に初回入院した血液疾患患者で以下の要件を満たす10名
  - 1) 内科病棟に入院中の患者
  - 2) 化学療法を実施した患者
  - 3) 外泊経験がある患者
  - 4) 退院経験がない患者
2. 調査期間：平成18年9月25日～10月2日
3. 調査方法：独自に作成した質問紙を用いた実態調査研究
4. データ収集方法：ナースステーションに回収箱を設置（消灯～起床時間は特定の場所で保管）

### II 倫理的配慮

1. 本研究の目的を説明し、同意を得られた患者に実施する。
2. 無記名、自由回答とし、回答の有無によって不利益は生じないこと、得られた情報は本研究のみの使

用とし、個人が特定されないよう処理する。

### III 結果

1. 回答者の背景（図1～3）

回収部数：8部  
性別：男性25%、女性75%  
年齢構成：31～40歳37%、  
51～60歳25%、61歳以上38%  
同居人（家族）有無：有86%、無14%
2. 化学療法（治療）後、初めて外泊したときについて
  - 1) 食事について（図4）

食事について注意していたことは、「生物を避けた」という回答が43%、「賞味期限を守る」36%、「バランス良く食べた」7%、「特に注意しなかった」14%だった。
  - 2) 外出時について（図5）

外出時に注意したことは、「マスクをする」という回答が47%、「人ごみを避ける」38%、「日焼けを避けた」15%、「外出をしなかった」という回答はなかった。
  - 3) 体調不良について（図6, 7）

外泊時に体調不良を感じた患者は50%だった。体調不良の症状としては、発熱、めまい・ふらつき、疼痛だった。また、その時の対処方法は発熱時に「アイスノンを使用した」、めまい・ふらつき時に「一人で歩かないようにした」、疼痛時に「安静にしていた」という回答だった。
  - 4) 外泊時の不安について（図8, 9）

外泊時に不安や疑問があった患者は50%だった。不安の内容としては、体調、食事、中心静脈カテーテル、嗜好品、同居人（家族）の病気だった。具体的内容については、体調は「急変時の対処方法」、「体調が悪くなった時の対処方法が分からなかった」、食事は「避けたほうが良い食べ物が分からなかった」、中心静脈カテーテルは「入浴後に汗をかいた場合の対処方法が分からなかった」、嗜好品は「飲酒はしていいのかわからなかった」、同居人（家族）の病気は「風邪がうつたらどうしようかとドキドキしながら家にいた」という回答だった。
  - 5) 現在の指導の現状について（図10, 11）

外泊前に説明を受けておきたかったことがあると答えた患者は13%だった。その内容とし

ては、「飲食についての具体的内容」だった。

外泊前の説明で役に立ったことがあると答えた患者は49%だった。内容としては、「食べ物について」、「熱が出たときの対応」、「マスクと含嗽について」だった。

#### Ⅳ 考察

血液疾患患者は、疾患と治療によって免疫力が低下しており易感染状態にある。そのため、入院中から感染予防について患者へ説明を行なっている。結果から外泊中も感染に対しての患者の意識が高く、注意していることが明らかになっており、入院中の指導内容を継続して遂行していることが伺える。特に、マスク着用や含嗽励行などの習慣的に行っていることが回答として挙げられていた。外泊前の説明も、「食べ物について」、「熱が出たときの対応」、「マスクと含嗽について」が役に立ったという回答があり、感染予防に関する内容であった。しかし、外泊中に不安や疑問を感じたと回答した人は半数を占めていた。不安の内容としては食事・体調管理・中心静脈カテーテル管理などであり、これらの対処方法など具体的内容を求めるものが多かった。これは、口頭での説明のみで、具体的な内容が不十分だったのではないかと考えられる。また、病院外では入院中とは異なる環境、役割があるため、外出や体調不良時などの不安は、外泊をして初めて気づくことが多いと推察される。このことから、「外泊前に説明を受けておきたかったことがある」の質問で、いいえが74%であったと考える。そのため、外泊中に振り返りが出来、安心して過ごせるように、パンフレットを用いた説明が有効であると考えられる。そうすることで、患者の不安を緩和し、安心して生活できると考えられる。

また、看護師間で統一した指導を行い、患者に視覚的に訴えることができる上でもパンフレットは有効だと言える。小林らも、「外泊用パンフレットがあることで、看護師は統一した知識をもって指導することができ、患者・家族も外泊中の生活基準があることで、安心して外泊生活を送ることが出来る」<sup>2)</sup>と述べている。

そして、家族などと同居している患者が多く、飯野らが「生活や疾病の自己管理には、家族の協力・サポートが必要である」<sup>3)</sup>と述べているように、入院中から家族への説明時間も確保し、理解を得ていくと同時

に、治療をひとつ終えた患者を自宅に迎える家族への支援も必要であると考えられる。

さらに、アンケートの自由意見として、「治療と治療の合間に外泊に行けることを早いうちから知りたかった」という意見もあり、入院当初から治療生活の見通しを提示していくことも、医師・看護師の役割の一つだろう。

今回の研究では対象者が少数であったため、有効といえるデータ数を確保することができなかったが、得られた情報を基にパンフレットの改正を試みていきたい。また、今後パンフレットを活用する上で、患者の生活背景を考慮し、統一した指導を行っていきたい。

#### Ⅴ まとめ

1. 患者へは入院中から指導を行っているため、感染予防に対する意識は強いが、外泊をすることで新たな不安や疑問を生じることがある。
2. 外泊前に看護師は口頭で説明を行なっていたが、統一した指導を行なうため、また患者に視覚的に訴え、外泊中でも振り返ることができるように、パンフレット改正は意義がある。
3. 入院中から家族へも説明を行ない、協力を得ていく必要がある。

#### 謝辞

今回、この研究を行なうにあたりアンケートにご協力していただいた患者様方に深く感謝致します。

#### 引用・参考文献

- 1) 2) 小林月子, 岡田美雪, 北村スミ子 他. 化学療法中患児の外泊時の生活指導の一考察: 外泊用パンフレットの使用から. 日本看護協会論文集 (小児看護). 33, 163-165, 2002.
- 3) 飯野京子, 石岡明子, 木崎昌弘. 第一章 看護を学ぶにあたって. 成人看護学4 血液・造血器疾患患者の看護. 東京, 医学書院, p.14, 2003.
- 4) 黒田裕子. 黒田裕子の看護研究 step by step. 東京, 学習研究社, 165p, 1999.
- 5) 鈴木ゆり子, 瀬尾孝子, 田原里恵 他. 血液疾患患者における退院指導を考える: パンフレット作成を試みて. 東京医科大学看護研究集録. 19, 47-52, 1999.



